語られた北條民雄

川津　誠

An essay on Images of Hojo Tamio

The［A1］image of a writer is made from various forms. Much information, including the events surrounding one of the writer's characters and the events occurring in everyday life, is used to create the writer's image. While not much is left to be said about Tamio Hojo, one can say a few lines about him, particularly about his characters and his life. This article attempts to create an image of Tamio Hojo using a few lines.

1

我々はいかにして作家のイメージを作るのだろうか。

たとえば平安の頃のいわゆる女流文学であれば、作家達と読者とはまず日常的な知己であって、手書きの作品を回覧した、などということが考えられる。書写されて流通していく作品はその作者についての情報と共に手渡されていくのであったろう。作家の死後もしばらくはその作家を知っているという人間の言葉を共有し作家のイメージを作り上げていくことができたはずだ。あまりにその情報が偏っていれば、それは知り人によってやんわりと訂正されもしただろう。その後、時が下り流通が階層と地域を越えて広がって行けば、作家を巡る情報は伝聞記録のごときものとなり、少しずつ正確さを失い、その代わり誰にも受け入れやすい虚像として作り上げられ、流通していくことになったはずだ。無論、多くの情報はデータバンクに集積されるわけではなく、家伝のようにこっそりと、然しそれ故の重さと確かさを持って隠匿され伝えられていったりもしたであろうか。

このような進み行きは、平安の頃に限らず、つまり紫式部のような作家に限らず、その後の時代においても大きな違いはなかったろう。作家と呼ばれることもなかったのだろうが。

それに対して近代という時代には、円本ブームに見ることが出来るように、出版メディアの確立が商業圏に文学を取り込んでいったことにより、広告が、あるいはその利用が必然的に文学流通の世界にも生まれてきた。その広告の

中に作家イメージの創出もあったということができる。紫式部や清少納言の時代に出版メディアがあったとしたら、彼女たちは二人並べられて引っ張りだこの人気者になり得ただろう、と想像が簡単にできるように、作家の姿を必要以上に求めるのではないだろうか。

昭和も半ばを過ぎた頃、川端康成がノーベル賞を取って、たとえば作家という存在についての知識が、小説を読まない文学に無縁な人間達にとっても、学校教育の知識として、あたかも常識の一部であるかのように受け入れられていくと、発達流通するメディアは作家や詩人を映像表現の原作の提供者と言うだけでなく、視覚的イメージとして世間に流通させていくようになる。三島由紀夫が映画に出演した、そのような形ではなく、例えば、遠藤周作であったか、インスタントコーヒーのコマーシャルに作家自身として「違いの分かる男」というキャプションと共に登場したことがあった。これあたりが最初かと思うが、そのイメージの流通は、例えば三十六歌仙の絵画イメージの流通などとは比較にならない。文学に縁のない人間達にとっても、そのイメージ、姿は芸能人のそれのように浸透して行くことになる。単行本の見開きページに写真が載せられて彼等の存立基盤である小説作品とつながってイメージを作るわけではなく、作家その人のイメージが作品を離れて独り立ちしていくことになるのである。むろん、書籍の売り上げに影響はあったろうが、必ずしもそのため、と云うことにはなるまい。売れている人だから映像イメージがそれなりの効果を持つと考えられるのであり、もし映像を流せば売れるということなら、作家達はこぞってテレビに出演すればよいと言うことになる。例えばコーヒーのＣＭに出演するのはそういうことではない。当時の遠藤の随筆「弧理庵シリーズ」の圧倒的人気にＣＭクリエーターは目をつけたのだと思われるが、ここで作り出された遠藤のイメージは書き損じの原稿用紙を丸めて屑籠に放り投げ頭を抱える、などと言ったパタンの作家イメージとは違う、ダンディで落ち着いた中年の教養ある紳士とでもいったイメージであった。こうして、例えば週刊誌などの雑誌媒体に作家がそ

の書斎でポーズをとる、いかにもという登場の仕方ではない露出形態を作り出されたのである。文芸雑誌だけでなく様々なメディアに小説、随筆などを載せるのはすでに出版メディアの確立以来、作家達の生活を支えるものとなっていたが、多岐にわたる分野の週刊誌をはじめとするメディアの氾濫は、作品だけではない作家の形姿をも含めたイメージを作り出し流通させていくことになるのである。

このことは、作家と作品との分離という、テクスト論にも繋がって行きうるかもしれない。作家の姿が、作品と無関係に情報として流通しているとすれば、作品の読みに、逆にその作り出され流通しているイメージが影響を与えていくことにもなりかねない。それによって作品の読みが深まることもあり得るが、ミスリードされる場合も当然ある。とすれば、作品はひとまず作家と切り離されて読まれることが必要なのではないか。作品内世界を世間によって色づけられた作家イメージで染めてしまうことは好ましくはない。テクストはテクストそのものとして読まれるべきものだ。

と、このようにテクスト論が考えるわけではないが、このイメージ流通の問題は、インターネット上での、ブログなどの自身の情報開示が容易になった現在では、作家自身によって自らが選択した情報が流通することによって、ますます大きな問題となり得る要素をはらんでいる。作家のイメージが作品と関係なく作られて流通してしまうということではなく、作品に対して作家が自ら思うようにネット上で情報を操作流通させていくことができるのである。むろんそれは現代作家に関してであり、文学研究の対象になる古典や近代（昭和期がその境界であろうか）の作家達には関係ないとは言える。しかし、現代の作家達も将来は、今のような文学研究が続いていくなら、研究対象になり得る。ブログの中に作家の意図を見いだすことが出来るとすれば。それが作家の意図によって流通させられていたとしたら。むろん、同時代の読者にその作品の作り手としての意図を説明し、その作品への興味を喚起してより多くの読者を獲

得しようとするのは、作家として当然の行為だし、当然の欲求だろう。日記書簡以上に、ブログなどネット上の情報の操作流出は明確に読者操作の意図を持っているのだとも言える。そして、読者がそこに作者自身の作品に対する意図、思い入れを見いだしたり、それを作品を解読する助けとしたいと思うのもまた、当然だと言えもする。それはおそらく、かつて文学研究者が作品についての言辞を日記書簡の中に捜し作家の意図を探ろうとしてきたのと変わらない。しかし、であればその故に、作家と作品を切り離すべきだと考えたのでもあったテクスト論的立場は、ふたたび同じような問題に出くわすことになりはしないか。作品の解釈が読者の自由な読みに委ねられるのではなく、作者によって暗黙の意図として示されたテーマなどを説き明かしていくことに読書の目的が限定されていく、といったような。

こう考えれば、やはり作品は作家から完全に解き放たれ作品そのものとして手に取られ読まれればいいのだ、と言い切ってしまいたいように思う。基本的にそう思いながら、しかし一方で、作家その人に対する興味、人間探求とでも言った欲求が読者をして作品をその手に取らせる大きな動機であるということも否定は出来ない。そしてまた、多くの人間は自らが知り得た作家自身について、例えば本を売るためと言った商業的な意図とは別に、その作家自身に関する情報を語りたがるものであるらしい。出版ジャーナリズムに、文学研究という名に求められて、と云うことも多々あろうが、様々な動機によって作家情報は流出し流通していく。作品によってだけではなく、それらの情報によって作家イメージは作り上げられていく、という面も確かにある。知っていることを語りたい。おそらくはそのような純粋な動機で書かれ流出し残された、多くの作家をめぐる言説が存在するのである。

それは、北條民雄においても例外ではない。癩病を罹患し全生病院という隔離施設に入り、わずか三年足らずの文学活動の後、生前にただ一冊の作品集『いのちの初夜』を残し、「癩」を病み「癩」を描き「癩」に倒れたというセ

ンセーショナルにすぎるイメージに出版メディアが便乗したとしか思えぬ素早さで、書簡日記に至るまでの断簡零墨を集めても二巻にしかならない全集を編んでもらえた（それは死の翌年のことであり、むろん僅か二巻にしかならない作品量だったことも幸いしたのだったが）作家、北條民雄。その存在が殆ど社会から隔離され隠蔽されねばならずあたかも世捨て人のように病院内に生きるしかなかった彼について、どのようにイメージは作られえたのだろうか。

例えば、北條の死後、式場隆三郎は自身が編集を担当した山雅房出版の『癩文学集　望郷歌』（昭和一四年一〇月）に寄せた文章（「癩者の医学と文学――北條民雄君と語る」）の中に、弟の「文学界」編集者式場俊三を訪ねた折のエピソードを披露している。ちなみに、式場は北條の昭和十二年一月十七日の日記にその来訪が記され、「流石に第一流の人なれば語気温和にして、自分如き者に対しても、恰も友人の如し。心より敬愛の念湧けり。」と親愛を示されている人物である。

> 珍しく手を繃帯してゐる。どうしたのかと訊くと、北條民雄が逢ひにきたが雪で病院へ戻れず泊めてやつた。そのあとで部屋にアルコールをまいて消毒し、火をつけたら火傷したのだといふ。北條君は文学界賞を貰ひその礼に全生病院から出かけてきたのだつた。

北條が式場俊三の部屋に泊まるにいたった夜の様子は、河上徹太郎の「北條民雄のこと」（筑摩書房版現代日本文学全集月報五十二号）に書かれている。北條を紹介されて「瞬間ハッとしたが、式場という人は何でも呑み込んでいる人だから、その当たり前の顔色を見て、こちらも何でもないんだなと思い、普通の文学者同士の初対面のつき合いに返った。」というのが河上の記憶で、北條の印象は「不屈と謙遜がほどよく入り混じり、自分の立場を割り切ったもの

がある」様だったと、作品からくる印象をつき混ぜた後天的なものではあろうがと断りながら、好意的な印象を語っている。

このような印象を河上に残した時間をともに過ごした後で、北條を世に出した「文学界」の編集者で当然癩という病気に関する知識もあったと思われる式場俊三が、北條を泊めた後の部屋にアルコールをまいて消毒する。そう年も違わない、年少の作家の来訪の応対をし他の作家に紹介するなどして共に時間を過ごした。武蔵野の外れ近い多摩全生病院の住人である北條が利用するはずの鉄道の時間は過ぎ、折からの雪で送り届ける手立ても難しい。宿をとるにももう遅く、それならあたかも友人になった気の勢いで北條に部屋に泊まれと申し出た。編集者の義務感もあったろうか。北條の思いは明らかではないが、その言葉に甘えてしまったのであった。その対応に、自分の病気に対する式場のスタンスを見ようとする気が全くなかったとは言えないかも知れぬ。「文学界」の編集者に対して作家であるという自分の位置を確認したかったという思いもありうる。それに対する式場の行為は、火をつけたら火傷したというのはいかにも迂闊だとして、北条に気の毒には思うが、考えられないほどひどい対応ではないだろう。責められる程のことではないし、隆三郎にも、俊三の対応を非難する言葉はない。俊三はこのことが北條の知るところとなるとは思ってもいないのである。この内容は、実際この出来事が起きた一、二ヶ月後で式場によって新聞か雑誌かに発表された文章にも書かれており、北條がその文章を読んで「極度の自己疎外と自己嫌悪に突き落とされた」と、式場の文章は嫌なところのないさっぱりしたものだったとことわりつつ、光岡良二は『いのちの火影』（一九七〇年七月・新潮社）に書いている。「このショックから彼が立ち直るのに、しばらくかかったと思う」とも。うかつに書いた隆三郎に責は求められようか。

それはともかく、ここに北條が、「癩」という病に冒されることによって身に負わねばならなかった社会の視線の

表れがある。「癩文学集」を編むことを任されるほどの式場の文章に示された、癩病に対する大雑把な視線。北條民雄は、ではこのような視線によってどのようなイメージを作られていたのだろうか。このような視線によるイメージばかりだったのだろうか。

本稿は、北條のイメージによって作品の読みをどうこうしようとするものではない。只、けして多くはない北條についての言説の中にいくらかなりと、その姿、イメージを見いだしたいと思うものである。「北條民雄」と名付けられた一人の作家の言葉を、文章を通して見出してきた「北條民雄」というイメージとは、ある部分重なり、ある部分食い違っているであろうはずの、そのイメージを。

2

皓星社「ハンセン病文学全集」第四巻は記録・随筆を集めている。その中に、北條民雄や明石海人、島比呂志らに混じって、津田せつ子という名がある。ハンセン病文学（そのようなものがあるかどうかは考え方だが）の全集とは、つまりハンセン病を罹患し療養所に生活することを余儀なくされた人々が、その生の拠り所として文学を見出し表現することを選んだ、その結果の集積なのだが、実に多くの人々がそこには名を連ねている。俳句や短歌の巻もあり、俳句短歌を日常の生活の中で嗜む人々は日本中に星の数ほどもいるのだから、ハンセン病の療養所にある人々が同じ様に詩歌に親しんでいるとしても何の不思議もないのだが、日常の生活を完全な自由の中で送っている者達とくらべ、かつては社会から隔離するために療養所に収容され、病が癒えた後も社会的偏見によって自分たちを社会に解放すること適わずにそこに留まり続けねばならなかった人々が、自分の日常の支えの一つとして言葉による、文字による表

現を選んでいるという事実には、文学という表現ジャンルに対する信頼を確かに繋ぎ止めてくれる力がある。津田せつ子もそのようにして表現することを選んだ一人だ、ということになる。

彼女には『曼珠沙華』（私家版・１９８１）と題する随筆集があり、その中から少なからぬ文章が選ばれているのだが、そのタイトルに「北條さんの思い出」というものを見出すことが出来る。北条民雄と時を同じくして全生病院に入院していた患者なのである。

彼女の文章には「あにさん」というものもある。同じように病を得て全生病院にいた兄との思い出を綴ったものだ。この中の昭和八年に入院した津田が二年ほどして初めて帰省した折のエピソードは、療養所にもそのような出入りがあったこと、津田の病がまださほどでなかったことを示して印象的だが、帰京して兄と共に病院に戻った時、北條が面会所まで迎えに来ていたことが書かれている。全生病院は病院といいながら非常に広い療養所で、集落とも村とも呼べるほどだ。つきっきりの看病を必要とする患者以外は、病室というよりはアパートのような集合住宅に部屋を持っていたり、寮にも似た建物をその生活空間にしていたりする。そして、病院本部とでもいう建物を通って外出し帰ってくる。「当時は外出する場合、着てゆくものを消毒に出し、帰園すると、この面会所で衣服を替え、消毒に出すことになっていた」と津田は説明しているが、広い園内を考えると、迎えに出るというのも何かのついでがあれば、そうおかしな事ではない。北條との特別な親しさがうかがえるエピソードでもある。

北條は、出発の時最寄りの駅から逆方向の電車に乗ってしまったことなどの話を聞いて「笑い出して、「傑作だな。第一振り出しがいいよ。所沢に行くなんてふるっているよ。」と一人でおかしがっていた。」と表現されている。友人と妹をわざわざ迎えに出ている姿は優しさを示すものだが、おそらくその後ろには「帰省」という特別な事柄がある。故郷との関係を完全に捨て去ることを要求されたりすること多かった中、帰省できる症状の軽さは嬉しいことだが、

思いもかけぬ扱いを受けたり不愉快な思いをしないとも限らないのである。「父母に会って話をすれば心残りはないので、近所の人に姿を見られないうちに帰ったほうがよいと考え、家には二晩泊まっただけですぐ東京に帰ってきた」と津田も書いている。津田だけの帰省であることをおそらく北条は知っていたのだろう。そこまでを思いやったのではなかったろうか。

この「あにさん」が北條の文章の中に頻繁に出てくる東條耿一である。昭和一二年八月一三日の日記には「夜、東條と人生論。今更の如く彼の苦悩に驚き、しみじみ深い尊敬を覚える。私は良い友を持つた。幸福である。」と書かれている、その東條だ。妹、津田せつ子については、直接北條の日記にその姿が登場することは殆どないが、印象的なのは昭和一〇年七月五日の、「六日記」と但し書きが付されたかなり長い、互いの日記を読み合うことが習慣化していることが明かされ、二人の交際の親密さが際だって示された記録の中にある、以下の部分である。

「どうしても草津に家を一軒建て、東條と二人で暮らそう。Sを彼の妻として、僕が彼の妹をもらったらどうだらう。けれど彼のシスはもう婚約してゐるかも知れぬ。それなら仕方がない。」

文面から北條が「シス」つまり妹のせつ子にさほど執着しているわけではないことが分かるが、それでも、東條の妹であることも手伝い、北條にとって結婚を考えることも可能なほど親しい女性であることは間違いない。その津田の「北条さんの思い出」「兄と北條さんと」（共に前出「曼珠沙華」より。引用は「ハンセン病文学全集　4」による）から北條のイメージを見てみよう。

「北條さんの思い出」は「不帰の人となって二十五年」とあるように、四半世紀を経て北條の在りし日を振り返ったものだ。「山桜」に北條が載せた「井の中の正月の感想」を引用するなど、北條の日常の姿よりは文学に向かう姿勢への言及が目立つ。東條の妹として嫁にすることを夢想しないでもなかった北條に対して、女性としての思い出が

見られないのが残念な気がする。

「まだ小娘だった私などは北條さんに対して畏敬に近い気持を抱いていたので、その前に出ると、自然と体が固くなって思うようにしゃべれなかった。兄の親友としてもっとも身近にいた人だったけれど、親しむこともなく遠くからスターに対する憧れのように見ていた。」「兄と話をしている時は「裸になれる」と言って、くつろいで笑っていた北條さんの明るい顔が、いまでも眼に残っている。」と書く一方で、「「辛辣な毒舌をたたき、会う人々をこき下ろし、酷評する一面、人なつっこいところもあって、年の若いわりに社交的な如才なさも備えていた」「孤独な人であった」と評してみせる。だがそれらは、個人的に見出された北條の一面、というほどのことはない。

これから八年ばかり後に書かれたとおぼしい、光岡良二の『いのちの火影』刊行後の文章「兄と北條さんと」では少し津田のトーンが変わる。「私ほど哀切の思いを持ってこの本を読んだものはいないのではないかと思う。その思いが私にこのペンをとらせた。北條さんがいのちの友と呼んだ東條耿一は私の肉親の兄であり、あの文中に出てくる一人一人は、若き日の兄の姿であり、その交友たちである。その身近に私も生きていた。青春と呼ぶにはあまりに灰色で希望も夢もなかった時代だったけれども、皆若い情熱を持って文学を論じ、恋愛を論じていた。北條さんは二十三歳、兄は三十歳で逝った。今にして思うとなんと若かったか」という文章は、自分もその身近にいたものとしての哀惜を示しており、ことに文名高い北條に対してより、兄東條耿一に対する思いが、言うまでもないことだが強く感じ取れるのであるが、兄と繋げて、北條の姿も見出される。たとえば東京創元社版の「底本北條民雄全集」上巻の付録に載せられている、着物姿で本棚を背景に座る北條の絵をめぐるエピソード。おそらく北條の外見を伝える唯一の絵姿なのだが、北條の死後その父親に渡されたが持ち帰られず事務所に残されていたことが明かされている。その絵を北條に頼まれて東條が書いた時の様子について「「おい、東條、美男子に書いてくれよ」そんなことを言って北條

さんは笑わせ、兄と二人で楽しそうであったと義姉は話していた。」と書いている。また、「北條さんの思い出」と同様ここでも「身近にはいたけれども、口をきくのが怖かったのである」と書き、津田の北條に対して持っていた印象の強さを感じさせるのだが、死を前にした北條のエピソードは津田と北條の一対一の対面が実に印象的だ。

北條さんが亡くなる数日前、義姉に頼まれてわたしが病室に洗濯物を届けに行った時のことである。北條さんの重態なことを聞かされていたので、私はびくびくしながらそっと洗濯物を置いて帰ろうとすると、北條さんは痩せて眼のくぼんだ蒼白い顔を向け、細い手で私の萎えた手を取った。

「君の手は冷たいね。可哀相に……」

と言って撫でさするのである。

「こんなに冷えている」、可哀相に……」

と繰り返して言う。こんな優しい北條さんに接したのは初めてなので、私はどぎまぎし、びっくりした。このとき、私はなんとなく北條さんに死期の迫っていることを感じた。それから数日して、北條さんは逝った。

長い引用になった。ここにいる北條は、確かに優しいが、死を前にして気弱な人恋しさに捕らわれているのでもあったろう。しかし同時に、死を間近にした苦しさの中で力を振り絞った行為だとすると、北條の持つ強さを見て取ることも許されよう。津田は「なぜか北條さんだけは、あのまま火花のような生を閉じた方が良かったような気がしてならない。」という文章でこのエッセイを閉じる。北條の激しさが印象に残るのである。

3

光岡良二が『いのちの火影』の「二年目の夏」「この夏の数ヶ月の北条の日々は、東条耿一との熱っぽい交友に明け暮れている。―略―それは同性愛の持つ激しい情熱にさえ似ている」とまで書いた、津田の兄である東條耿一は殆ど北條についての文章を残していない。東條は北条の死後五年もたたない昭和十七年九月になくなっているし、肖像画を残してくれただけで十分だったとも言えるが。東條が創元社版全集下巻に寄せた「臨終記」は、北條の死にゆく日々の様子を伺うことが出来る貴重なものだ。

「私が抱起してやるとほつとしたやうに、さうして呉れると助かるなあ、と嬉しげであつた。」「蒲団が重いなあ……と苦しげに呟いた。」「君、代筆して呉れ。と云つたり、ああ、小説が書きたいなあ……と悲しげに呟く事もあつた。」と、このような言葉を重ねたあとに東條が記すのは、「死ぬ二、三日前には、心もずつと平静になり、私などの測り知れない高遠な世界に遊んでゐるやうに思はれた。おれは死など恐れはしない。もう準備は出来た。只おれが書かなければならないものを残す事で心残りだ。だがそれも愚痴かも知れん、」という北條の、辿り着いた死を受け入れようとする心境であり、「底光りのする眼をじつと何者かに集中させ、げつそり落ちこんだ頬に小暗い影を宿して静かに仰臥してゐる彼の姿」であって、そこに「何かいたましいもの」を感じながらも、つまりは「或る不思議な澄んだ力を」感じる自分との繋がりであった。北条の日記の中にたびたび登場する東條であれば、津田もその一人であったような女性問題への言及が繰り返しなされているのであれば、そういう面をも描いて欲しかったという思いが残る。

同じく北條の文学仲間であった光岡良二は『いのちの火影』を著すことになるが、全集には「北條民雄の人と生活」を書いている。

「小刀ででもえぐつたやうに細く小さな、そしてどこか三角な眼、それは笑ふと殆ど無くなつてしまひさうになりながら、その奥にキラと光る何かがある。始めての人ならまともに合せてゐられない眼」をした、しかし「本来の性情は明るい、人なつこい、或る意味で楽天的なもの」を持った青年、と描写する。「十時頃に目を覚ます。同室者達はもうそれぞれ作業に出てしまつてゐる。独りで朝食の汁を温めたり食卓を調へるのを面倒臭がつて、そのまま書斎に入り、粗末な菓子と茶で朝食に代へ、それから昼までは書けても書けなくても机に向つて過ごす。午後も気が向けば書き続ける。」という北條の一日の過ごし方は、作家として世に出てからのものではあろうが、文学だけに向き合っていた北條の姿を強調して見せている。「北条には友達が少なかつた。殊に文学に専心し出してからは、もう交友の範囲は五指に満たない位だつた。多くの人は彼の強いむき出しの我儘や孤高だけを見てそれが愛情への苦しいほど清潔な要求から出てゐることを知らなかつた」と、書く時、そこに浮かび上がってくる北條は、彼等の人となりを知り共に文学に向かおうとするものにとっては自明であるとしても、多くの北條を見知る程度の人々には理解されること少なかったであろうプライド高い気むずかしいと敬遠されがちな人間である。津田も書いていたように。そのような北條観は一面の真実ではあろうが、他方で彼等が北條との繋がりを強調するために選ばれているもの、でもあろう。

『いのちの火影』で光岡は「それを見聞したものの消滅とともに消え去ってしまうそのような一人の人間の具体の姿を細大漏らさず残しておきたい」と書いた。その彼が残した北條の生活する姿をいくつか拾ってみよう。なお（　）内の説明は引用者による。

「野球は入院前、亀戸時代に工場の野球部に入って相当やったらしく、プレイは洗練されており、そのために小柄な彼が一塁手をやらされていた。負けずぎらいで、自分たちのチームの旗色が悪くなってくると、「俺にやらせろ、やらせろ」と言って、捕手をやったり投手をやったり、自分で買って出て夢中であった。」

「彼は河上氏の印象を「材木屋の若旦那という感じだった」と評したり、資生堂で一足早く帰ってゆく横光氏が「北条君、さよなら」と太い声で言った口調を私たちの前でまねて見せたりして、機嫌が良かった。」（昭和十一年二月、式場俊三の部屋に泊まって帰ってきた後で）

「十二畳半のガランと人の出払った部屋の前も裏もガラス障子を開け放して、裸電球がぶら下がった畳の真ん中に、北条は猿股一つの裸になって、大の字にひっくり返っていた。—略—痩せて肋骨の数えられる胸や、貧弱な手足の様は、叩きつけられた蛙そのままの哀れさで、それが精一杯威張り返っている—略—私たちが、あらためて彼の滑稽な姿に笑いだすと、北条も仕方なしに、顔中くしゃくしゃにした泣き笑いの表情になった。」（昭和十二年六月、密かに自殺を決意し東京大阪を二週間放浪した後帰院した二十三日に）

「彼は十二畳半の共同居室の障子の外側に「病中につき年賀欠礼仕候　北条民雄」と半紙に墨書して貼り付けていた。」（昭和十二年の正月に）

「北条は夕方など風呂帰りの濡れ手拭いをぶらさげたまま、ベッドの私を覗きに来た。彼は今まで大抵彼が見舞われる側であったのが逆になって、見舞う立場になったことが何となく嬉しそうであった。痩せてはいたが気魄に満ち、毎日下痢に悩んでいる病人とは思えなかった。」（光岡が痔の手術で重症病棟に入っていた折に）

「北条は、自分がもし元気になれたら、病院内のある娘と結婚して、草津の自由地区へ行って住みたい。それで、私からそんな求婚を先方の女に伝えて、気持をきいてくれないか、というのである。—略—もし彼女が受け入れてく

れるなら、それだけで俺は希望を持って闘病してゆけると思う。そんな希望があれば、きっとよくなれるにちがいない。」―略―

「なんにも知らない私なんか、とても、あんな人の奥さんになんかなれません」という少女の答えは、ちょっと揺すぶりようがなかった。―略―北条は、「それでいいんだ。いや、その方がよかったんだ。どうもいろいろ骨を折らせて済まなかった。と、心から済まなさそうに素直に答えたので、私は安心もし、肩の荷を下ろした気持でほっとした。（死の一月ほど前に）

『いのちの火影』は、北條の日記や書簡、つまりは全集の文章をベースに、残されたそれぞれの作品に北條を知るものとしての立場から評言を加えていき、それを繋げてその入院後の生を追いかけたものであり、光岡その人の北條との関わりの中で出会い感得した北條民雄という人物についての描写は意外に少ない。北條自身に語らせる、という方法を基本においているのだと思われるが、それでも見たようにいくつか、北條の姿が見える。例えば、自分の病気の重さを知りながら闘病のために好ましい女性の心を求める北條の姿はただプライド高く文学に専念することで周囲の患者達を睥睨するかのような青年の敬遠されがちな姿とは違っている。作家として扱われた喜びを仲間に分け与えるようにはしゃいで真似などしてみせる姿は、その後にやはり癩病患者として胸の内では距離を感じられていたことを知り落ちこむ姿とともに、北條の年齢相応の若さを鮮やかに示しているようでもある。

光岡はこのように自らの見知っていた北條の姿を、すでに「青年」という、全生病院の院内誌「山桜」の懸賞小説に入選した小説の形で、北條の死後まもなく描いて見せている。その中では、生島が北條であり杉井が光岡ということになる。生島は「頬骨がひどく尖り、何時ものやうにぱさりと覆つた髪」。これが、彼の唯一の容貌の描写だ。他

は、癩病を負った人間としていかに病気と、病気を負った生と向かい合うかという問題についての思いが描写されていく。

例えば。

「俺は毎日死を考へない日は殆どない」

とかれはよく重苦しい気持で告白したが、生島の場合それは弱々しいペシミズムでなく、自分の置かれた屈辱の生存へのはげしい忿懣のしわざなのだと、杉井は思つた。

「癩者の苦痛なんて、社会にとつて何ものをも生みだしやしないんだ。癩者は結局首をくくつてしまふ事が一番いいんだ。」

と言ひ切る生島に、杉井は単に若い自棄者の暴言といつて済ませない、はげしい誠実さが籠つてゐることを感ぜずにはゐられないのだつた。

おい、杉井、俺もこの頃聖書を読み出したぞ。ヨブ記はいいなあ。

癩者は宗教以外には一つも生きる道はない。その事はもう確かだ。その事を俺はもう幾月も考え抜いて来たんだ。だが、だが俺は駄目だ。俺はどうしても神を信じられない男だ。俺自身の奥底にはげしくそれに反発するものがあるんだ。

杉井はふと、或時の生島の言葉を思ひ出した。

「ああ、俺は、今一度、五分間だけでいいから元の體になりたい。癩といふ意識すらもなく、絶対に自由な個性の喜びをのびのびと呼吸したい。其の五分間を之からの生涯に換へたつて惜しくはない。」

（「青年」引用は前出『癩文学集　望郷歌』によった。）

おそらく、光岡が見た北條の姿は、このようであったのだ。生島は、つまり北條はけしてやけになって粗暴に人生を扱ったりはしない。そのように受け止められかねない言葉を口にすることは多々あったとしても、その裏には真摯な姿勢がある。その思いが最後の「五分間だけでいいから元の體になりたい。」という切実で切ない願いに表れている。「絶対に自由な個性の喜びをのびのびと呼吸したい」という言葉はそのまま光岡の願いでもあるだろう。癩を病み苦悩のうちに呻吟する誰もの心の内にある願いだと言ってもいい。「絶対に自由」という表現は癩から解放されてどのようにも、どこででも生きられる境遇であることを示すだろう。北條は、そのような癩者の思いを他者に向かって表出してくれた存在なのである。光岡は自身も文学に心摑まれた人間であるが故に、北條を、癩院の外の世界で作家となり得た力を、その幸運も含めて認めずにはいられないのである。基本的にその思いは、三十年を経て纏められた『いのちの火影』でも、変わるところはなかった。

4

『癩文学集　望郷歌』に、「北条民雄・明石海人　それから癩の無名作家たち」という多田貞久の文章が収められている。多田は、「昭和十一年の新嘗祭の当日、私は所用があつて全生病院を訪れ、「山桃」の編輯者の麓花冷に逢ひ麓

の紹介で北条をも相知る機会を得た。」と書いているが、北條の日記はその前後を欠いている。

多田が見た北條の外見は、発病後長い麓の「かなり重い結節癩の症状が現はれて居つた。眉毛も脱落してゐたし、眼も侵されてゐるやう」であるのにくらべ、「極く初期の神経癩と云ふことで、素人眼にはそれとわからぬほどの症状」でしかなかった。北條は多田に「患者たちは長くゐると皆もうこの生活にすつかり慣れ切つて刺激のない豚のやうに鈍重になつてしまふんですよ。私はそれが恐いのです。私もそこまで堕落して文学を忘れてしまふのが耐らないのです」というのだが、「十数年を懸命に癩文学に精進し続けてきた先輩の前でのものとしては、言ひ過ぎはしないか」と「麓の蒼ざめた顔色を不図見やつた」という多田の心配りは当然に思える。

麓は「癩者の文学には二通りの行き方があると僕は考へるんだよ。君の文学の態度はその一つだ、然し、癩者の生活に慣れた者がその生活を徹して観た世界も『癩者の文学』として成り立たうぢやないか」と北條に反論するが、それをどのように北条が受け止めたかは言及されていない。同じような表現は日記や書簡の中で見られるものであり、北條が「癩」という病気に取り込まれてしまうことを、小説を書こうとするものとして恐れていたことは事実と考えてよい。それはそれで正しいとも言える。しかし、麓という、「十数年を懸命に癩文学に精進し続けてきた」、重い症状が外見にそれと分かるほどである先達を傍らに置いた時その文学に志す純粋さの表れというより、傲岸ともとれる、思いやりに欠けた発言ととられてしまうだろう。文学に関しては先輩も後輩もない、厳しい姿勢を貫いた北條の評価されるべき姿なのでもあるが、このように書かれると、そうは受け止めにくいだろう。

『癩文学集　望郷歌』には、すでに見たように編者の式場隆三郎の「癩者の医学と文学―北条民雄君と語る」と題する文章がある。そこでは、北條の文学への思いの強さが散見される。

「私の眼は、もう何年もつでせう?」と二十四歳の北条君は受持の医者にきいてゐた。「さあ、十年は持つだらう」と医者は答へる。「十年か…」と若い作家は感慨深げに肯く。

「十年で書きたいことを、書いて終わねば…」と彼は淋しげに私の顔を見守つた。

―略―　医者の方では患者を慰めるために、最大限として十年といつたのかもしれぬ、しかし若い作家にはあまり短く感じられたらう。その十年後に來る暗黒の世界を、彼はどうして生き抜かうとするのか。

式場は北條が書くことにその生の総てを費やすであろうことを疑っていない。また、フローベールの手法で、病院内ではなく社会にある癩者を書いた小説を、という式場に対しては「今までは病院の中だけ見てきました。これからは社会にゐる癩者にも眼を向けるつもりです」と言う北條である。

これらの言葉を重ねて読めば、けして多田や麓を前にして北條が傲岸に麓たちの文学を見下していたわけではないことが理解されるのだが。多田は北條について「彼は天才であり、情熱的な若さをもつて、素晴らしい文学を未開拓の素材の上に形作つたのであつた。そしてその文学が世間的に高名になればなるほど、島木氏に対する抗弁と全く同様な抗弁が同じ癩者の仲間から北条に向けて放たれ、そして彼は療養所と云ふ局限された世界に於てさへも尚全く孤独な生活を生きつづけてゐたのであつた。」と評してみせる。しかし、北條の文学を高く評価しながら、一方で同じように病む人間達にとっては簡単に評価しきれない存在であったことを示唆するのである。その根拠をこの麓を交えた時間だけに見出すのは行き過ぎであり、他にそれなりの理由がなければならないが、それは示されない。読むものにとっては、おそらく式場の文章の誠実に文学に向かう北條の姿よりも、麓の存在を無視したかのような北條の言葉の方が印象に残るのではないか。つまりは、ここでの北條の印象はけしていいとは言えないのである。

5

「文学界」（昭和十二年十二月号）に発表された「続重病室日記」の九月二十八日のくだりに、日戸修一が遊びに訪れたという記事がある。日戸が式場隆三郎の病院を訪れたこと、そこが繁盛していたことなどを語り合っているのだが、折からやってきていた「病友光岡良二」と「三人で快談」と北條は書いている。「快談」と書くからにはよほど話が弾んで楽しい一時だったと想像される。式場の教え子であり、北条の日記の中では「日東」と誤記されたりしながらも、その名を幾度かみることができる。光岡の『いのちの火影』では、「二十四で死す」の章、参列者が少ない葬儀の場面で「ただひとり若い医官の日戸修一氏が白い予防衣の勤務衣のままで来てくれた」とあり、「日戸氏が祭壇の前に膝頭をそろえて坐り、両掌を軽く畳につけて頭を垂れた姿勢で「北條君、君は……」というような呼びかけで、新劇俳優のせりふのような感傷的な悼詞を語り出したので、私は思わず噴きだしそうになるのをこらえるのに骨を折った。」と、きまじめそうな青年医の姿が描出されている。その日戸の「青年癩医の手記」が『癩文学集　望郷歌』に収められている。癩治療の現状や癩医として働く自身の感懐を述べたものだが、「北条民雄」と題したくだりで北條に言及している。しかしそれは北條と交流のあった者として北條の人となりや彼から受けた印象を綴っているというわけではない。

私は文学者でもないし、詩人でもない。だから、北条民雄を文学的に論ずるなどといふことは不可能であるし、敢て私は恥にすら思ふ。

私は北条民雄の文学は決して現代の療養所を語ってゐるものでないことや、一たい北条が偽装深刻さ惨澹さを反抗的に訴へたんで、依然として療養所は癩の楽園であり花園であり一人としてここから逃走しやうとするもののないことを屢々かいた。これでは、随分多くの反撃をうけ非難をうけた。しかし、だれがどう言はうと北条は文学者ではなく、誇大するヂャーナリストである。

結局若い北条がえらかつたのだ。癩のためでなく自分の位置を賭博して療養所を十四世紀のお伽話のやうな暗澹さにもどし、かうすれば浮気な輿論は自分の文学にどうしても気を向けてくるだらうかとかう考へた。しかしこのため癩の事実はいかに障害されたか知れないのである。

（日戸修一「青年癩医の手記」前出『癩文学集　望郷歌』所収）

「恥にすら思ふ」「偽装深刻さや惨澹さを反抗的に訴へた」「誇大なるヂャーナリスト」「癩の事実はいかに障害されたか」といった語句が目を引く。つまりは北條は文学者ではなく誇大なジャーナリストに過ぎず、癩病院の現状を歪めて人々に誤った癩病観を与えた、という非難であった。光岡は『いのちの火影』の「書き忘れの人々」の中で、「いかにも青年客気の文章であり、北条の文学動機をこれ以上誤解のしようのないほど、みごとに誤解している。―略―この文章は日戸氏自身がジャーナリスト的心性の人であることを語っている。」と断罪した。光岡の語り口は、日戸の言われなき非難に憤り反駁するというほど強くはない。取り上げるほどのこともない程度のものだ、というスタンスのようだ。

日戸の文章については川端康成が、北條の死を描いた「寒風」の中で触れている。

川端は「癩院の或る若い医師」の文章を「人身攻撃をするつもりではなかったらう」「ただ真実を闡明したに過ぎなかったらう」「文章は堂々と厳格で、その医師の義憤の調子さへ表はれて」いたと、日戸の文章の真偽は問題にしていない。「死屍を鞭打ち、人格の真相を発かねばならない程、故人は大人物でも大作家でもなかった」のであり、「二十三四と言へばまだ未熟な子供」だと書いた。「私は医師の非難を信じもしなかった。その文章を読んだ時、故人の為人の意外な一面が発かれてゐるとは更々思はず、その通りで、先刻承知だと肯ひながら、しかもきわめて浅く聞き流して、故人に対する私の見解は少しも変らなかった。」とも書いた。「若い癩医によると、故人は甚だしい自己主張の卑俗な小人で、傲慢で、猜疑心が深く、嫉妬心が強かったといふのである。私から見れば当然さうあるべきだった。怪しむにも、咎めるにも足りなかった。若い芸術家に通有の病弊に過ぎなかった。驕慢に自己を守らなければ所詮作家の成長など覚束ない。まして故人は癩と云う重荷を背負ってゐた。余程肩肘張ってゐなければ崩折れてしまう。」というのが、川端の北條（文中では谷澤）を弁護する言葉であった（「寒風」昭和十六年一月「日本評論」。引用は新潮社版「川端康成全集第七巻」による）。

光岡も、川端の文章をこの少し後まで引き「誇大妄想的な自負が故人には絶対必要だった。反面自虐的な反省の強い故人だった。一癩作家を離れて言っても、この二つの心理を人並みより少しく誇張する性癖から、芸術の美は耿耿と発するのかも知れなかった。」という、芸術家北條への評価を受けて、「この意を尽くした川端氏の言葉のあとで、私が言うことは何もない。」と述べている。「傲慢」ではあったが、「甚だしい自己主義の卑俗」さなどはなかった、と。また、院内の人々とは殆ど接触がなく、その小説が読まれることも、文壇で有名になった作家だと知られることも殆どなかったとも書いた。

むろん、日戸の文章にある北條の姿が真実なのかどうかはここで問題にするものではない。このように北條が表現され、その表現が流通し北條の印象イメージを作って行くこともある、ということだ。

6

川端は、「寒風」で北條についての日戸の文章に対して殊更に弁護することをしなかった。それは、作家だもの当たり前だよ、といった言い方であった。

「故人が重々厄介な患者にちがひなかつたのは、予て私に分かつていた。それを増長させたのに私の責任もあつた。」

「全く衰え切つて力つきて死んだ顔だつた。瞼は深く窪み、眼球の形が突き上つてゐた。貧相な顔が異常に小さくなつてゐた。眉も髪も薄い感じだ。可哀想にと言つて、寧ろ笑ひたくなる。—略—しかし、癩の結節や斑点は現れてゐない。この意味では綺麗だつた。また、大方の死顔にある、静かな安らぎは、この顔にもあり、精神の高さも微かに匂ひ残つてゐた。ただ、いかにも可哀想な死顔だつた。」

「人としてその作家を買いかぶつた者は、実は世間に一人もなかつたのだ。」

「二十二三歳の若さで世に認められた故人が同院の癩者達を見下し、鳥無き里の蝙蝠で、鼻持ちならぬ振舞のあつたらうことは私にも想像がついた。」

「故人は早く悟り澄ましてあきらめ、われひと共に日向に和むといふ人間ではなかつた。強い自我を曳きずり廻し

て、いかに生くべきかと探りよろめく人間であつた。生臭い醜さが身近の人の鼻を突いたであらう。かういふ人間は人を愛さうとして憎む。死後の著作権を私にくれると遺言したほど故人は肉親を厭つたわけだが、これも罪は半ば故人にあつたと思はれる。」

「その癩作家の気負つた嫌さを私も薄々感じてゐないわけではなかつた。しかし寧ろ尚一層気負ふやうに私はけしかけて来た。」

「言葉によつて己を飾らうとし、言葉によつて天の真に届かうとし、その矛盾にあがきながら、したりげな苦渋の身振りをしてゐた癩の青年は、力尽きた今、可笑しい程可哀想な死に顔で、たわいなく横たはつてゐた。」

川端はこのように北條について、その死について書いた。しかし、結局川端は北條の生前の姿を鮮やかに活写することはなかった。死の床の姿は実際に見聞きしているから書ける。しかし、日常の姿は知らない、ということでもあったろうか。「私は故人を遠くから見てゐる人に過ぎなかつた」というのが、川端のスタンスだった。葬儀に出てきた母親について描いてはいるが、実際は父親であり、このように川端は周到に癩患者を出した家族への心遣いを示していもする。

そのような川端のあり方を問うているのではない。川端のこの小説が、北條民雄という作家の死を描いたものであることは、発表年を考えれば、読者には知りやすいことであったろう。その中でこのように川端は北條を描いた。そこには、癩を病みその病の中で自身の表現を求めて呻吟し、世に入れられることになりながら結局十分な活動の時間も許されず病に倒れた一人の「可哀想な死顔」をした作家の姿が浮かび上がってくる。そのイメージが、読者に流通していくことになった、ということだ。病む自身の内面を描き続けた北条民雄という作家については、その作品、日

記、書簡を通してイメージを作り上げることが出来る。しかし、外側からそのイメージを肉付けして行くにはあまりに北條を描いた文章は少ない、といわねばならない。津田や光岡の文章は、北條の身近にあってその日常の姿を伝えうるものであったはずだが、そうはなりきっていなかった。日戸の北條への非難にしても、文学に専心する上での我が儘、と流してしまえそうな程度である。見てきたように、北條のイメージは、いかにも、癩に苦しみつつその生を文学に刻み込んでいった人物、という枠を出てはいない。恰もそのような制限がきめられてあったかのように。つまり、生きている北条民雄の姿は、それとしては殆ど語られていないと言ってもいいくらいなのだ。それは、「いのちの初夜」に代表される作品と癩と云う病によって作られた北條のイメージがそれほどに強かった、ということだ。

見たように、光岡は『いのちの火影』で、癩院の人々は北條についてやその作品のことなど殆ど知らなかったと述べていた。そのように、我々は未だに、北條民雄という作家としての名前を持った人間の姿を、知らないのである。癩と闘って死んだ、癩者の復活を果たした夭逝の作家、北條民雄というイメージばかりがここにはある。

附

一、「癩」という表現は現在ではその歴史的経緯を踏まえ「ハンセン病」と呼ぶのが適当であるが、本稿ではまさにその歴史的経緯こそが問題であるため、そのまま使用している。

二、北条民雄の表記は、川津は『いのちの初夜』初版や創元社版全集の表記に従い「北條」とするが、本稿中、光岡良二の『いのちの火影』と『癩文学集』の表記は「北条」であるため、そのまま引用している。なお、引用は旧仮名遣いはそのまま、字体は適宜改めた。